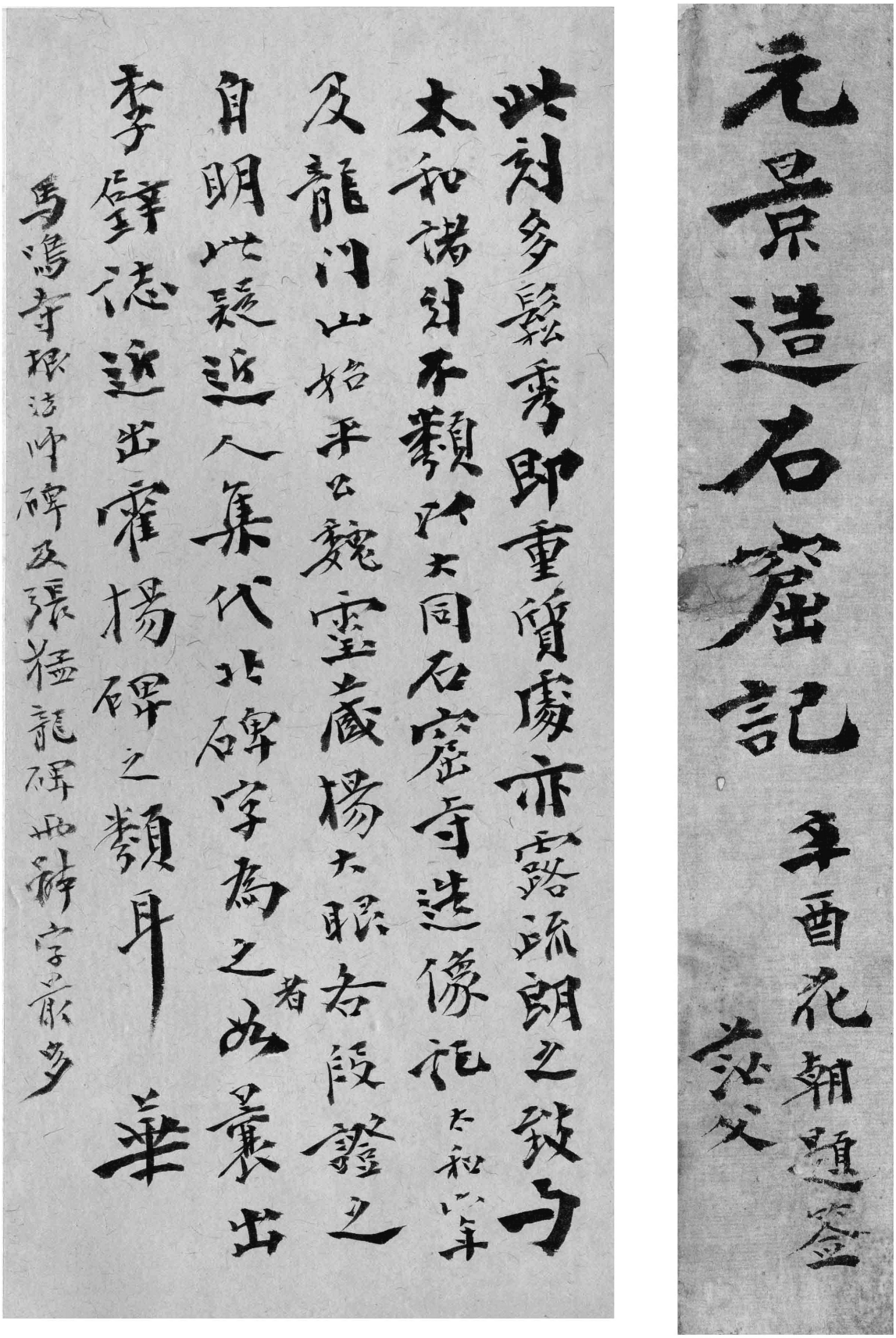
図版①「姚華題簽、題跋」



元景造石窟記　辛酉花朝題簽　茫父

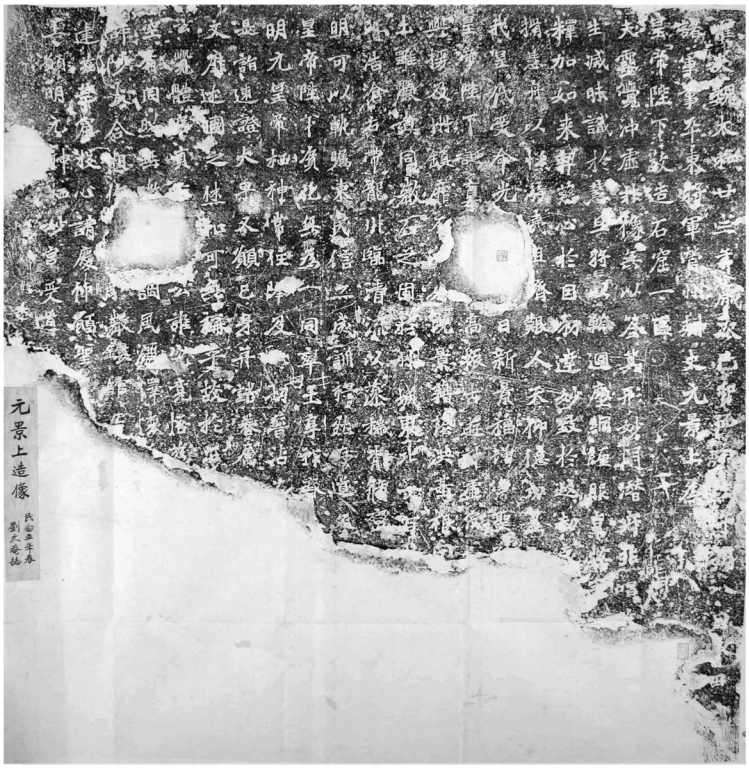
此刻多鬆秀即重質處亦露疏朗之致与
太和諸刻不類代大同石窟寺造像記太和六年
及龍門山招平公魏靈藏楊大眼各段鑿之
自明世疑近人集代北碑字為之始蓋出者
李鐸徒逞出霍揚碑之類耳　華

馬鳴寺根法師碑及張猛龍碑此碑字最多

碑法帖拓本の題記・⑤「元景造像記・姚華旧蔵本」

図版②「元景造像記部分」

近代に発見された造像記であり、中国東北の遼寧省義県の万仏堂石窟にある。整拓本によれば、文字は上端部分三百字ほどが残るだけである（図版③）。図版②に見るように銘文は大変重厚でありながら、点画は躍動感をみなぎらせている。同時期の龍門造像記と様式的には共通するが、文字の構成などに独自な趣を見ることが出来る。中国近代の康有為（政治家・書家1858〜1927）や梁啓超（政治家・書家1873〜1929）らは、この造像記の書を高く評価している。梁啓超は、「天骨開張、光芒閃溢」（文字構成が大変伸びやかで、筆力が溢れんばかりであるの意か）の評語を用いている。図版に示した拓は、清末民国期の金石書画家・姚華（字は重光、茫父と号す1876〜1930）の旧蔵本である。題簽は、「元景造石窟記　辛酉花朝題簽　茫父」と六朝風の楷書で書かれている。中華民国10年（1921、大正10）の春（花朝、陰暦の2月頃をさす）、四十代半ばの書であり、巻末に跋文が二回書かれている。題簽と同じく、やや扁平な文字構成の楷書体で、この造像記の六朝書としての位置づけを論じている。また姚華は、『弗堂類稿』という著作を残している。その中で多くの歴代の碑刻書を論じている。



図版③「元景造像記整拓本」

この欄に関するご批評、ご意見、ご希望、ご質問などをお聞かせください。

私宛に直接メールで、また編集部宛にお送りただければ幸いです。
伊藤　滋　メールアドレス
mokkei@galaxy.ocn.ne.jp

書道芸術院
平成の群像（2013）

大井　美津江

「書に生かされて」

書道との本格的な出合いとなったのは高校に入学して、初めての書道の時間でした。田舎の小さな中学校では、お習字の時間は特になく、年輩の先生に指導を受けておりました。

書くことの好きだった十五歳の少女は、普通に上手に書いてきたつもりでしたが、しかし私の書いた字を観るなり「こんな字どこで習ってきた」と高校で書を指導していただいた山本聿水先生に一喝されました。言われた少女はそのことも理解出来ませんでした。以来、たゞひたすら山本先生の字を必死でまねたのでした。その後、前衛の世界にも触れ、引き込まれていきました。高校時代は、墨すり、書くことに没頭した日々でした。

やがて、大東文化大学に進学し、古典を原帖のように臨書をする学友に刺激を受け書の原点と魅力に魅せられました。

その後、大学一年の秋から中島邑水先生の教えを受け、又大きな転機を迎えたのでした。邑水先生からは「書は人なり」と厳しく教えられました。先生は書以前に、人間性の向上を目指すことを一心に説いてくださいました。

書作品が人の心を打つかどうかは、書く人の心の内面に深く関わるので、感動する心、感性を磨くことを常に例をあげて説いていただきました。

自分の書を観て、何かを感じその人の心を動かすような作品を書くべく年を重ねるごとに考え続けてきました。

では、どうしたらと考えると、道は遠く終りの見えない世界です。書に、特に前衛書に出合って生涯、書に支えられ、同時に生かされていることを身にしみて感じております。これからも私の書の美を追求しつづけるという大きなテーマを背負って歩いていこうと思います。

〝己〟

書のひろば

理事長　辻元大雲

第65回毎日書道展開幕
文部科学大臣賞　船本芳雲氏に
会員賞本院関係4名に輝く

65回の記念展となった毎日書道展は、審査関係のすべてを終了し7月10日より国立新美術館にて開幕、17日からは東京都美術館会場もオープンした。国立新美術館会場は、通期陳列作品（審査会員以上全、会員賞）以外は前期（漢字・大字・篆刻・刻字）、後期（かな・近詩・前衛）に分かれ、更に会友作品はⅠ期・Ⅱ期に分散展示される。東京都美術館会場には理事の2点目作品、東京展関係入選（U23含む）が展示される。参観者はよく確認してご覧いただきたい。

記念展の入賞者は表記のとおり、全作品を対象とした「文部科学大臣賞」は近代詩文書部理事の書燈社顧問、船本芳雲氏の自作詩文書が栄誉を射止めた。

会員賞は記念展のため一割増の33点、そのうち本院関係は左記の4名。

漢字部　竹本龍汀（広島）
大字書部　川島舟錦（高知）
刻字部　三宅　梵（福岡・千歳会）
前衛書　大石仙岳（富山）

久し振りに4名受賞となり喜ばしい。そのほか毎日賞以下の公募会友、U23入賞者は来月号にて発表される予定。

7月21日（日）にはプリンスパークタワー東京で午前中美術評論家武田厚氏による「手島右卿の世界性」と題して講演会が行われ、特別展開催にあわせタイムリーな企画であった。

午後、2000名を超える参列者のもと盛大な表彰式が挙行された。先に決定していた「毎日書道顕彰」を石原太流、小原道城両氏に贈呈。その後文部科学大臣賞以下各賞が毎日新聞社社長・毎日書道会理事長朝比奈豊氏から贈呈された。2時間余の式はスムースに進行し、続いて隣のコンベンションホールでの祝賀会は超満員の盛況であった。

書道芸術院毎日展祝賀懇親会

毎日書道展祝賀会当日の7月21日、午後5時より芝パークホテルにて書道芸術院関係者による毎日書道展出品者祝賀懇親会が200名余の参加者を得て盛大に開催された。当日ご来賓として本院機関誌「書道芸術」にておなじみの伊藤滋先生にもお出でいただき、錦上華を添えていただいた。

前田龍雲事務局次長の司会進行で、展覧会主要役員・当番審査員の紹介などのあと会員賞をはじめとする入賞者が紹介され、祝福の言葉が飛び交った。

特に会員賞受賞者の喜びは格別で皆さんから祝福と乾杯の応酬で楽しく賑やかであった。

その後二次会へと皆さん繰り出して喜びを分かち合った。二次会には毎日書道会西村事務局長もお出でいただき盛り上げてくださった。

書道芸術院毎日展祝賀懇親会

日本中国文化交流協会代表団
辻元大雲理事長訪中

このほど日中文化交流協会代表団が中国・上海市文学芸術界聯合会の招請により派遣されることとなり、本院辻元大雲理事長が団員として参加する。

期日　7月30日～8月5日
訪問先　上海、湖南省・張家界
団長　加藤千洋（日中文交常任委員、同志社大学大学院教授）
団員　辻元大雲（日中文交常任委員、書道芸術院理事長）
同　黒田佳子（詩人・井上靖氏次女）
同　大矢高弓（日本画家）
秘書　竹本リサ（日中文交事務員）

ここ2年程交流事業が停滞しているが、文化芸術関係の交流事業を進展させるとの意義を重く見ての実施となった。後日報告をさせて頂く予定。

小林抱牛遺墨展開催

国立新美術館での「手島右卿展」に時期を同じくして、東京上野の森美術館にて開催された。初期の超大作詩文書をはじめ、代表作が勢揃いして圧巻であった。

会場には手島先生作「抱牛」の実作が国立近代美術館より特別展示され、大きな反響を呼んだ。国立新美術館には同作品の陶板複製が展示されており、これも話題を呼んだ。

横浜赤レンガ倉庫2013　Sho is it!

［現代書］の活性化を願って〝書と絵画の熱き時代〟の再現を目指し、横浜赤レンガ倉庫で2回目の開催となる。この企画展の特色は一回ごとに御破算にして新たなメンバーで開催することで、参加回数に関係なく過去の実績（肩書）なども無に等しい。実にユニークな展覧である。7月9日～15日

※本院関係（千葉蒼玄・千葉紅雪・東素子・佐々木浩子・杉本敦子）ほか36名出品。

漢字 (五)

佐藤莱扇

「琴対」形式の作品について。この形式は「古琴」の形に似ていることから「琴対」と呼ばれるそうです。前にも触れましたが、聯語は短く一行書き・下部に落款を入れます。

今回は清代・陳鴻寿の作品を取り上げてみました。陳鴻寿は、隷書に関しては後漢の〈開通褒斜道刻石〉など、いわゆる摩崖の字を好み作品は「簡古超脱・簡古超逸」などと評されます。

①汲古得脩綆
②秋濤駕大輪
③丙子春月書於古呉（年月日・場所）
④曼生陳鴻寿　（名号）

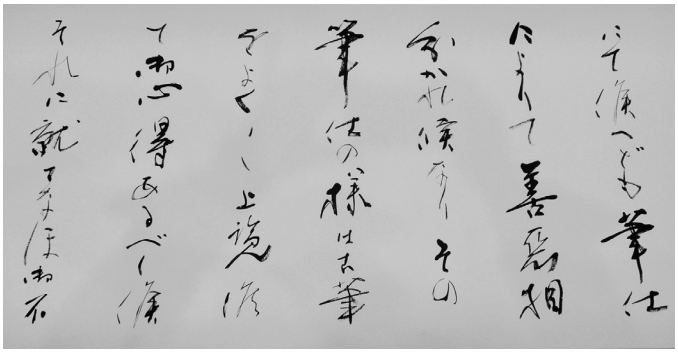
伸びやかな線で飄々とした印象を受けます。自然体です。自分が作品を創作するとき、ついつい表現が過剰になってしまうことがあります。「無」になれず意識して書いているからです。この作品は聯語の部分を多く取り、六分の一くらいのスペースに落款を入れています。この比率については自由です。趙之謙の琴対で聯語・三分の二、落款・三分の一という構成の作品もあります。陳鴻寿がこの五言聯を書いた年齢と今の私は同じです。対聯について勉強している過程で沢山の刺激を頂いています。この次の書道芸術院展では「琴対」形式に初挑戦してみたいと思います。

陳鴻寿（ちんこうじゅ）　五言聯（ごごんれん）　嘉慶二一年（一八一六）紙本　各幅一二八・八×三〇・三㎝

21世紀の書
―私の主張―

現代詩文書 (五)

大平邑峰



「入木抄の一節（部分）」

大平邑峰書

作品を書く場合、自分が思うように書くことができればよいのですが、制約の中で書かなくてはならない場合もあります。地元でのある書展で、巻子仕立ての形式を指定されました。折帖に臨書することはよくしましたが、詩文書を巻物にするということは経験がありませんでした。考えてみれば、以前は手紙といえば巻紙に書くのが当たり前でした。残念ながら小生巻紙を使うことほとんどなく、どうしたものかと思案しました。

まずは何を書くかでした。詩文をいくつか、構成も考えながら試作してみましたが、何かしっくりきません。それならと思い、引っ張り出してきたのが尊円親王の「入木抄」。その中にいつか書いてみたいと思っていた一節があったのです。六百余年前の文章、それも候文、なかなか書く機会がありませんでした。公募展のような現代、近代というような縛りのない書展でしたので、これでいこうと決めました。

～筆仕（づかい）肝要たること～

紙上に字をなし候ことは、能筆も非能筆も、同事にて候へども、筆仕によりて、善悪相分かれ候なり。……

書を習っている人みんなに読んでもらえたらと淡々と分かり易く書き留めるつもりで書作することにしました。

手島右卿の書芸術——その世界性

TESHIMA Yuhkei

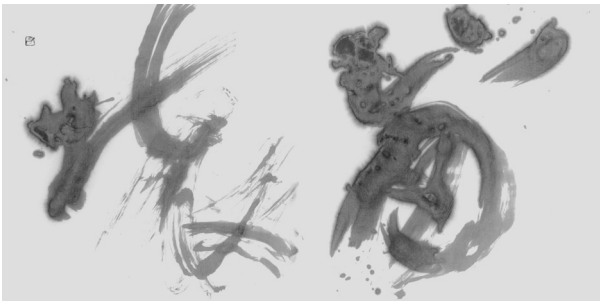
7月10日[水]〜8月4日[日]

国立新美術館

「抱牛」

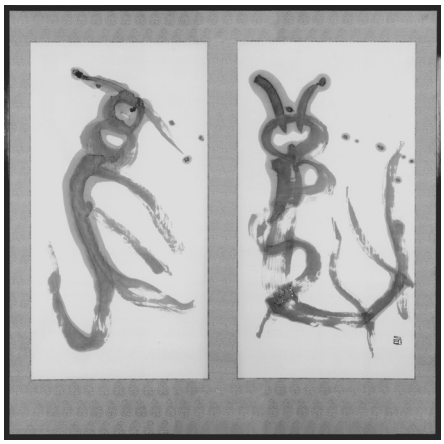
1955(昭和30)年　東京国立近代美術館蔵　69×140㎝

「崩壊」



1957(昭和32)年　光ミュージアム蔵　69×140㎝

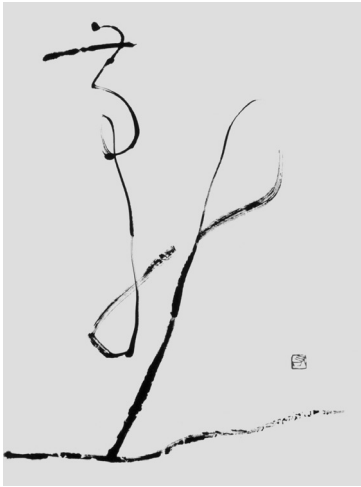
「龍虎」



光ミュージアム蔵

1967(昭和42)年　133×71㎝(×2)

「燕」



個人蔵

1960(昭和35)年　70×51㎝

「愚直」

1962(昭和37)年　学校法人国際代々木学園蔵　70×139㎝

雁塔聖教序（唐 褚遂良）②

漢字研究部臨書課題 ＝（半紙普通判・縦使用）左記の法帖より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題 ＝（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）左記の掲載以外も可。

※落款を必ず入れる
署名、もしくは○○臨
（押印のみも可）

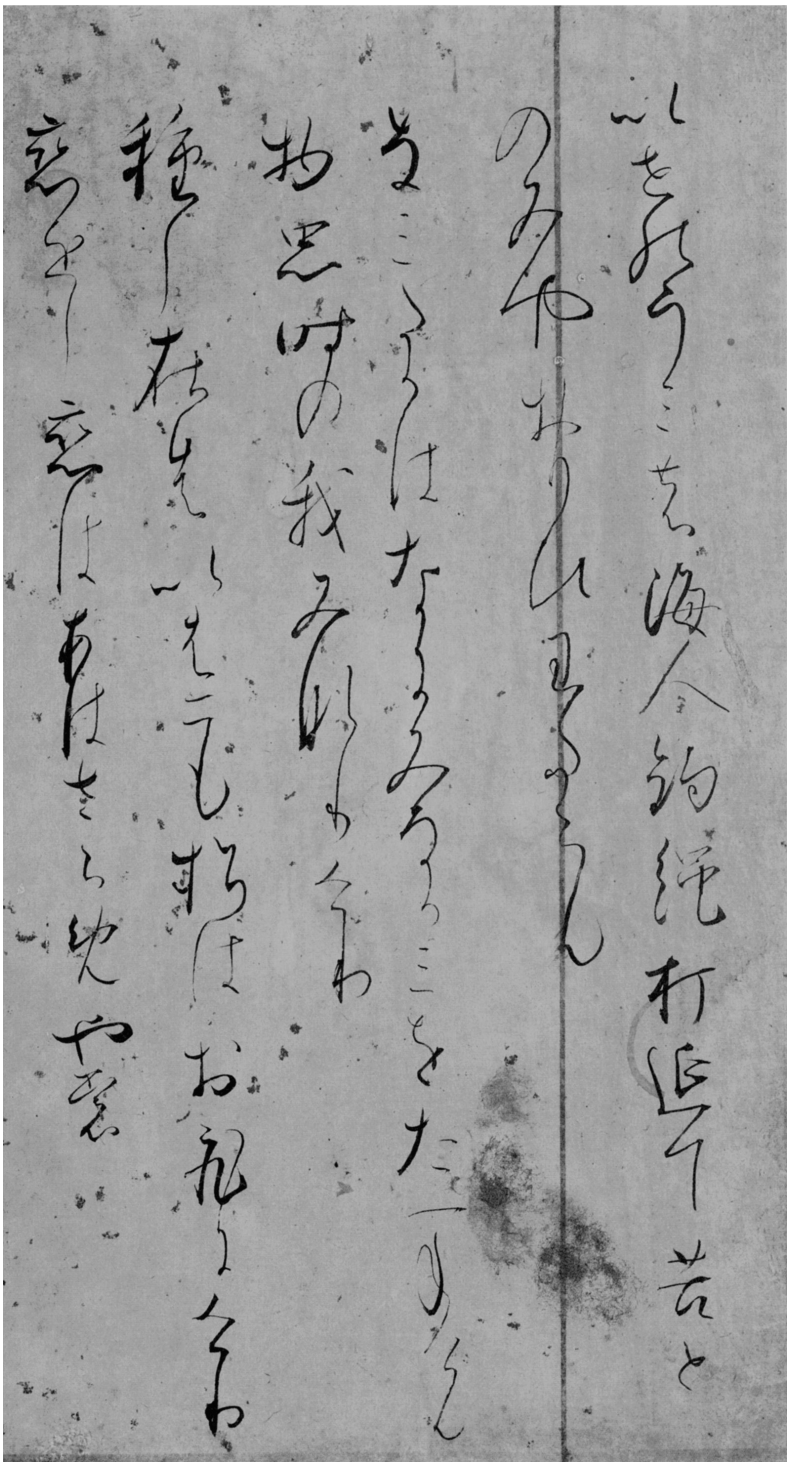
〈解説〉 褚遂良の書は、「孟法師碑」（641年）、「枯樹賦」（630年）、「太宗哀冊」（649年）などが有名。特に「雁塔聖教序」（652年）は楷書における最高傑作の一つとされ、後の瘦金体につながるなど後世に多大な影響を与えた。陝西省大慈恩寺にある大雁塔の最下層南入り口の左右に現存。高さは約2メートル。両碑は同形同大の黒大理石で、碑額は、「序」は「大唐三蔵聖教之序」、「記」は「大唐三蔵聖教序記」とそれぞれ二行に書かれ、碑文は「序」は右より、「記」は左より書かれている。（編集部）

運百福而長今。／妙道凝玄。遵之／莫知其際。法流

古筆鑑賞

113

筋切（伝藤原佐理）②



（90%縮小）

〈よみ〉
いせのうみの海人釣縄打延て苦と
のみやおもひわたらん
なみだがはなにみなかみをたづねけん
物思時の我みなりけり
種し在ばいはにも松はおひにけり
恋をし恋ばあはざらめやも

〈解説〉
料紙は鳥の子の素紙、またはつけ染めによる数色の色紙で、表面に少々大きめの飛び雲文様や、羅紋が漉き込まれている。さらに金銀のもみ箔を散らす。時には横転した銀泥の下絵、縦に引いた銀界も見えるが、これは、もと歌合せの清書用に作られた料紙を切断して利用したことによる。「筋切」の名称は、この銀界に由来する。

かな研究部臨書課題

- 競書作品は、左の古筆の掲載部分より**歌一首以上を書く。（全臨も可）**
- 用紙は**半紙普通判（料紙可）**
  〈**たて長**に使用〉
  別紙を裁断して貼付も可。
  半懐紙は、半紙サイズに切って使用のこと。

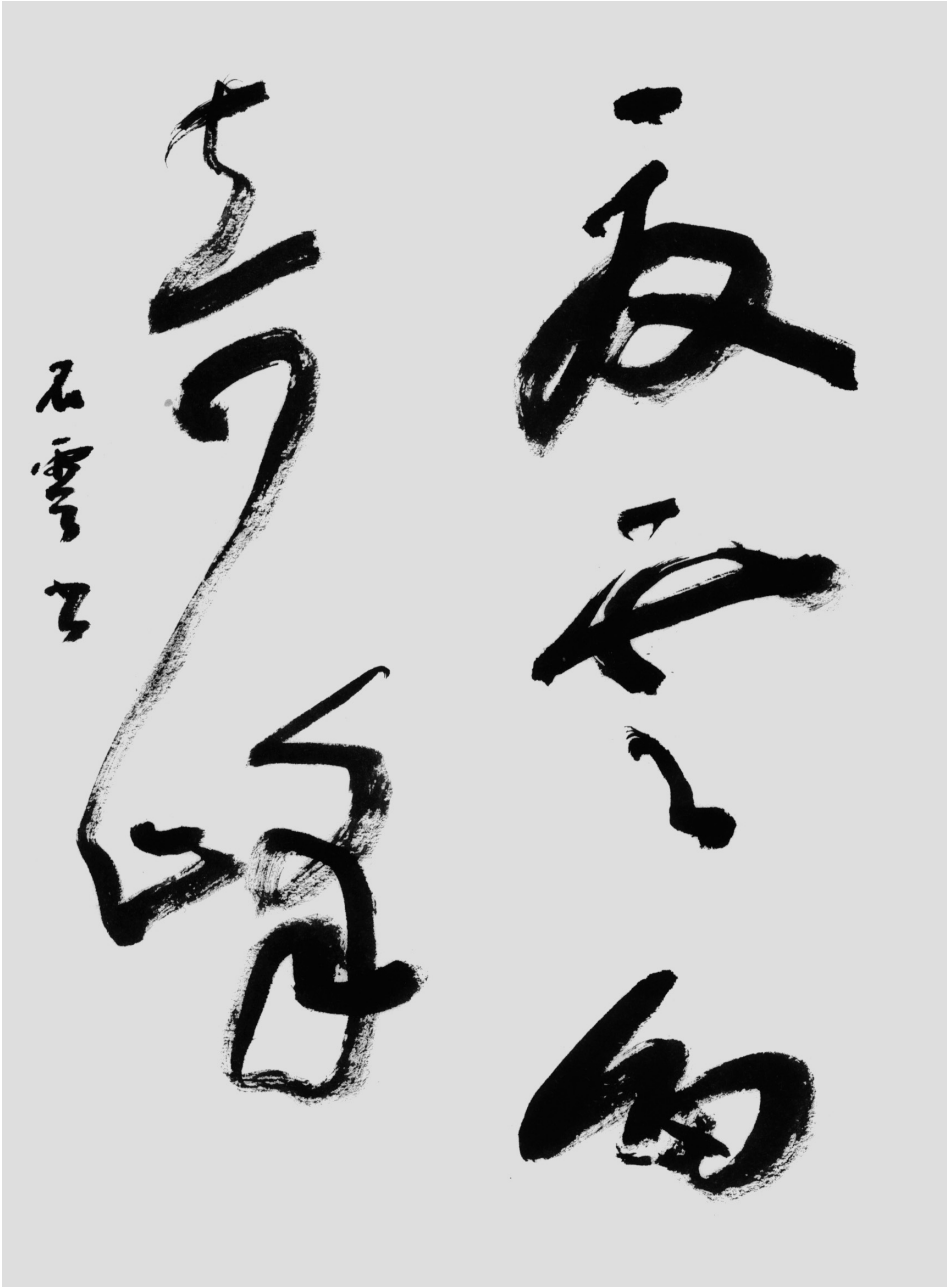
特別研究部臨書課題

- 毎日展公募サイズ以内・縦横自由
- 左記の掲載以外も可

※落款を必ず入れる
署名、もしくは
〇〇臨
（押印のみも可）

漢字規定　初段以上【九月十五日締めきり】　用紙　半紙普通判

小竹石雲選書



夏雲多奇峯　よみ（夏雲奇峯多し）

書体＝自由

習い方解説（五）

小竹石雲

夏雲多奇峯　（陶淵明）
（夏雲奇峯多し）

味わいのある草書に挑戦してみました。

書風は懐素千字文を参考にし、一行目三字は比較的坦々と書き、二行目の二字を大胆に伸びやかに書き全体をまとめてみました。

◎気をつけた点

・筆先の微妙な紙へのあたりを大切にしながら間のとり方にも配慮して騒がしくならないように気をつけました。

・軽い線が浮薄にならないように心がけました。実画、虚画の区別をしっかりつけて書きました。

・連綿線の長くしたため「峰」の上部を開放的にし、下部を絞るようにまとめてみました。

漢字規定 秀級以下 【九月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

東福青篁選書

樹木方盛

よみ（樹木方に盛なり）

書体＝楷書

習い方解説 (五)

東福青篁

樹木方盛（樹木方に盛なり）　（禮記）

「樹木は夏になって盛んに茂る」の意です。

参考手本は北魏末期のもので、北方系の楷書の中では整斉、穏和な書風の「高貞碑」を参考に致しました。

字形は横への広がりがあり、やや偏平です。

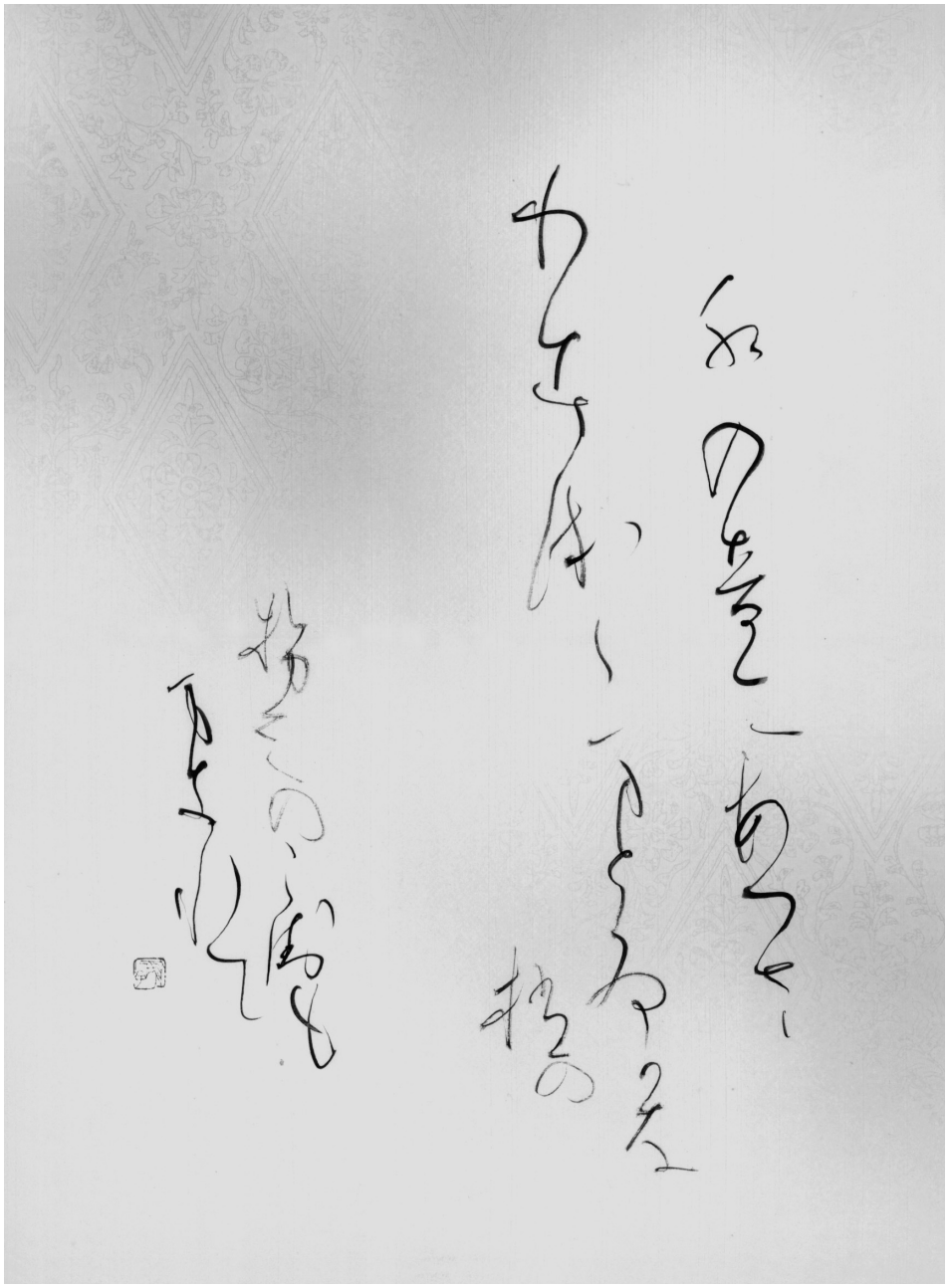
用筆は方筆（方勢）で鋒先が外に表れる為、鋭く力強い筆致が生まれます。

起筆では、筆圧を充分に働かせ、特に横画は息が長く、途中で力を抜かないよう気を付けましょう。

墨は濃墨使用で力強い表現になります。

同時代の「張猛龍碑」や、方筆の特徴が明確な龍門の牛橛・始平公造像記と、学書を拡げていきたいですね。

かな規定　初段以上【九月十五日締めきり】用紙　半紙普通判（料紙可）　大辻多希子選書



よみ方　水の音に(に)あつさわす(春)る(流)る(流)ま(万)とゐか(可)な
梢のせ(勢)み(ミ)のこゑ(衛)もま(万)き(支)れて

創作

習い方解説（五）

大辻多希子

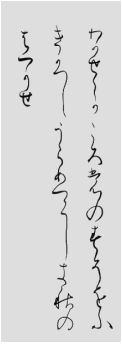
水の音に暑さ忘るるまとゐかな
梢の蟬の声もまぎれて　（西行）

水辺納涼といふことを、北白河にてよみける。ここ北白河では、涼しげな水の音に、集まった人々も暑さを忘れてしまうことだ。梢になく蟬の暑苦しい声も流れの音にまぎれてしまって。（新潮日本古典集成）

今回の作品は、中心より左半分の上部に広い余白を取りました。一行目に、二行目のるゝの所では行の中に白い部分を取り込み、次の行や上部の余白と呼応するよう表現しました。

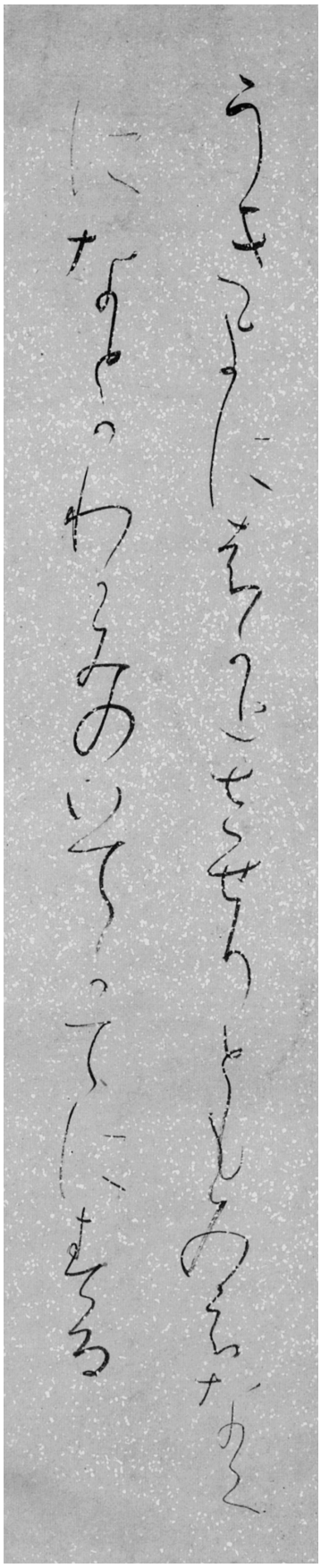
かなの料紙には、色のボカシや絵柄の入った美しい紙があります。料紙を生かした構成により、一層流麗な作品を省みて下さい。

余白　例　関戸本古今集



かな規定　秀級以下　【九月十五日締めきり】　用紙　半紙タテ1/2（料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真のうたを全臨、または部分（二字以上の連綿）を臨書する。

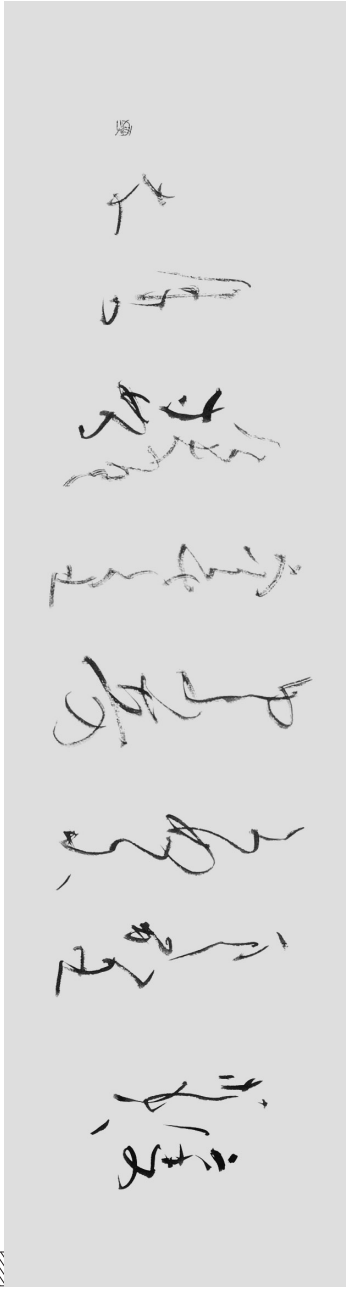


高野切第三種
（掲載写真縮小93％）

よみ方　うきよには(者)か(可)どさせりともみえなく(久)
になどか(可)わが(可)みのいでが(可)てにす(春)る

かな条幅規定　【九月十五日締めきり】　用紙　小画仙紙半切（料紙可）

見越雪枝選書



よみ方　庭のお(於)もは(八)ま(万)だ(多)かわ(王)か(可)ぬに(尓)
ゆふ立の空さり(里)げ(介)なく(具)す(寸)める月か(可)な

創作

出品券貼付位置

習い方解説 (二)

見越雪枝

庭の面はまだかわかぬに夕立の
空さりげなく澄める月かな
（従三位頼政）

横作品は、行間の動きが必要と考えます。

一、二行をやや寄せ、空間をとり余白を考慮。

上部は中央にいくにつれて、湾曲を描くようにしました。

庭ので潤筆、すめるで墨を継ぎ徐々に右へ流れ、上部に余白をとりました。

※よこ形式に限る

漢字条幅規定　初段以上【九月十五日締めきり】用紙　小画仙紙半切

村山元信選書

月到天心處　風來水面時　一般清意味　料得少人知

（月天心に到る処　風水面に来る時　一般清意味　料り得たり人の知ること少なるを）

（邵雍）

書体＝自由

習い方解説（五）

村山元信

詩は、漢詩であれ、その他の詩であれ、一部でなくできれば全文書きたい。詩人に対する思いであり、書人のていねいさである。

今回の参考手本は、五言絶句。二十字ですと、三行書きも可能かと思います。いかがでしょう。また、空間構成上から詩人名などを入れてみることも考えられます。研究してみてください。

漢字条幅規定　秀級以下【九月十五日締めきり】用紙　小画仙紙半切

前田龍雲選書

清暑澄潭月

（清暑潭月に澄む）

（楊凌）

書体＝自由

習い方解説（五）

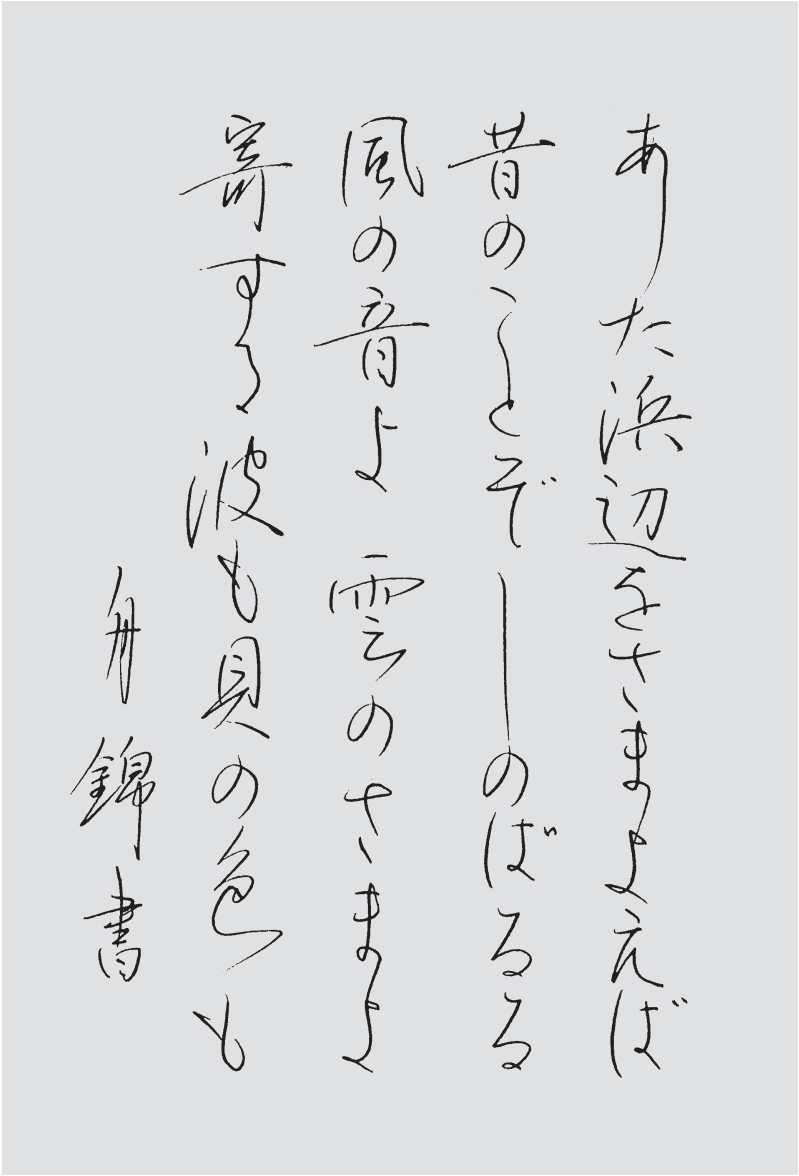
前田龍雲

北魏時代、造像記などの楷書を参考に書いてみました。この時代は力強く気品を備えた文字の多いのが特徴です。少々固い雰囲気ですが、歯切れよく鋭い線質です。どちらかといえば側筆を使いますが、浅い線質にならないように注意してください。

意味は「暑い時でも碧潭に映っている月影は涼しい」です。

ペン字規定【九月十五日締めきり】

川島舟錦選書



用紙＝はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体＝自由

習い方解説 (五)

川島舟錦

山や田畑に囲まれ、山桜が咲いたね、新緑になったね、もう小川に入ってもいいねと、折々の季節を感じながら育った私が海辺の町で過ごすようになって三十余年。台風の近づいた荒れ狂う海の凄さは、自然を敬うことを覚える。

海も空も真っ赤に染める〝釣瓶落としの夕日〟に心動かされた時から秋が来るのを楽しみにしている。今日こそは！と思っていてもいつの間にか真っ黒闇になっていることが多いけれど部活中、生徒たちと『息を呑む、言葉にできない数分間』は、生きるエネルギーになる。

思い出にひたり、景色を堪能しながら、砂浜をゆっくり散歩してみたい…と思う。

※落款を必ず入れる。
（**自分の名前**を入れること）

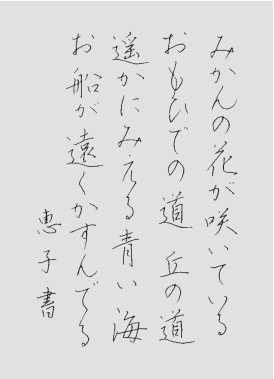
今月のホープ作品各部総評

NO.626

ペン字部　師範　鶴田　恵子

懐広く豊かな運筆と漢字かなの連綿が美しく確かな字形が余白美を生み出した統一感のある作品。

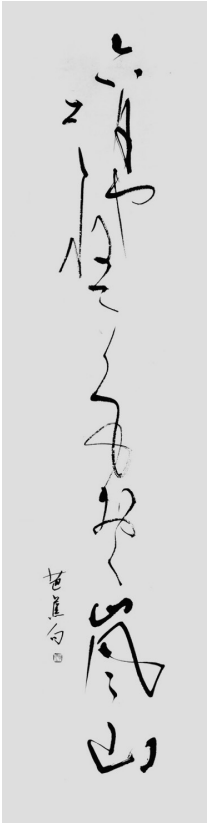
◎ペン字部総評　行書で四行良く知られた課題故にまとめの工夫が必要となる。美しい連綿とは何が違うかが今後のテーマ。（和楓評）



かな条幅部　師範　吉田　佑子

切れのよい線が大きく動き、古筆美をとり入れながら現代性豊かな逸品。独自性が深い魅力です。

◎かな条幅部総評　誤字が少なく概ね上出来。作品の雰囲気を壊す墨量過多、極端に大きな字の使用は、厳に慎しみたい。（明子評）



前衛書部　特選　奥山　翠峰

構想のモチーフとこの時の心情をぜひ伺いたい。自然の流れであったとしても、まさしくホープだ。

◎前衛書部総評　あくなき冒険たゆまぬ前進。全体的にひねりも入り、前途洋々この調子。（慧香評）

現代詩文書部　特選　岩崎　陽光

構築性の高い重量感のある構成が見事。多彩な線質を駆使したことで余白が美しい。「蔵」の書き順確認。

◎現代詩文書部総評　表現したい目標を明確にして作品制作をしている方が増えました。（鄭雲評）

漢字条幅部　師範　武部　光子

暢びやかな筆致の行草表現は自然で無理なく、適度な潤渇の変化がリズムを醸し出す。

◎漢字条幅部総評　半折での創作表現は形式がやや固って平凡になりやすい。書体や書風の違いなどを積極的に研究したい。（大雲評）

漢字部　師範　今関　梨霞

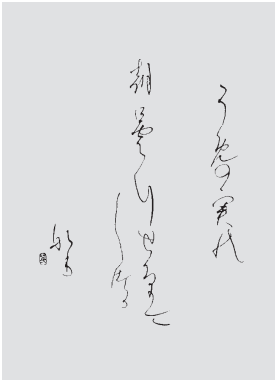
静かに始まり感情の昂りに従って後半線に深みが加わった。前・後半の連綿の変化にも工夫がある。

◎漢字部総評　高齢となっても半紙の上なら遊べる、冒険も出来る。手本に似る喜び、似ない喜び双方味わってほしいもの。（翠風評）

かな部　師範　伊藤　英子

しっかりとした基本を身につけての躍動感が素晴らしい。深い息遣いの伸びやかなリズムが白眉。

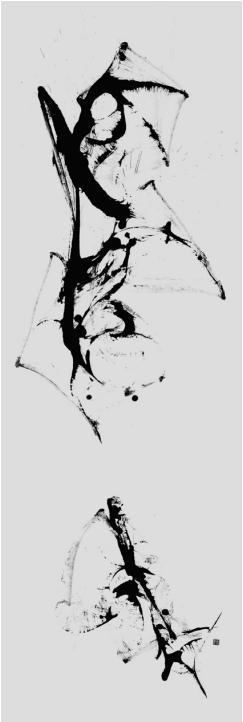
◎かな部総評　紙の大きさに似合った字の大きさ、線の太細などがあります。どの位かは、手本の解釈で身につけましょう。（洋子評）



今月の
特別研究部優秀作品（特選）

前衛書（蓮紅）

竹ノ内 寿紅「しずく」



竹ノ内 寿紅書

180×60㎝

◆筆圧の強さがかすれの表現と紙面の余白とがバランスよく配置されている。観賞者も心身共に舞う感。（倫子評）

◆明るい紙面構成で余白美が光る作。鋭い線質で空気感を静寂にして下方に余韻をうまく残した。（蒼玄評）

◆シャープな細線が明るいリズムを生み、中心部の厚味ある筆致と共に爽快な気分の作。（大雲評）

◆リズムのよい明るい作。二つの塊のバランスが絶妙で、美しい余白美が、奥行きを感じさせる。（明子評）

板橋雅邦書

60×180㎝

漢字（恵雅）

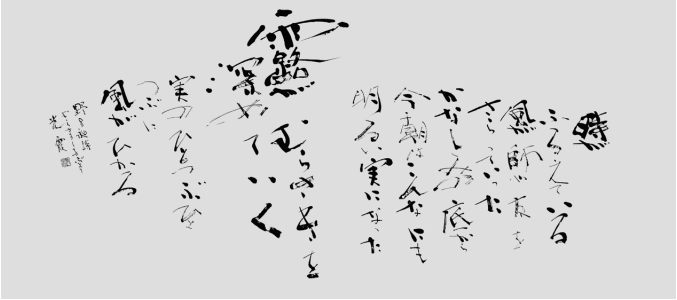
板橋 雅邦「銀燭吐」

◆漢字横形式として中央部の大胆な動きが要となり成功している。やや渇筆がうるさかったか。（大雲評）

◆行間の取り方に意識したのか、少々うるさく見える。四行目を見せるには三、四行目行間共に一考を。（倫子評）

◆前半五行めまでと、後半が稍、異質に感じられるのは私の眼にだけか？次を期待させる力作です。（明子評）

◆筆の開閉、リズム感、スピード感があり調子よく書けている。渇筆はやや軽く粗いところがある。（蒼玄評）



高村光霞書

60×137㎝

現代詩文書（白珠）

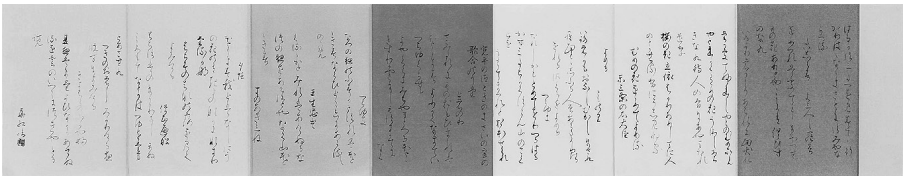
高村 光霞「野呂昶の詩」

◆むらさきしきぶという植物を認識して鑑賞すると更に味わいが増す作。行間のとり方がすごーい。（明子評）

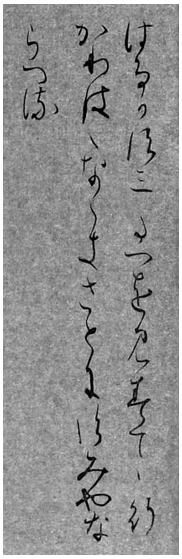
◆余白の効いた紙面構成で明るく瀟洒な作。強く鋭い線質にも起因するか。制作風景が目に浮ぶ。（蒼玄評）

◆明るく爽やかな作。文字群が音楽を奏でるような軽妙なリズムを醸し出し、中央の盛り上りもよい。（大雲評）

◆心の中でリズムを取っているのを手に伝えて表現されて大変楽しく拝見。字の変更には場所を一考。（倫子評）



千葉華紅臨　35×135㎝



拡大

臨書（蓮紅）

千葉華紅「臨関戸本古今集」

◆濃密な書きぶりがよい。用紙の色の濃淡と墨の濃淡を合わせると全体の味わいが変化するか？印一考。（明子評）

◆緻密で鋭い線質の関戸本古今集を見事に再現している。特徴的な転折もゆるまずに書けている。（蒼玄評）

◆筆線の変化を流れにそってさまざまに見せてくれてる。墨の濃さが少しうす目にすると書き安いのでは。（倫子評）

◆関戸本古今集のリズムと微妙な変化をよく表現している。線の強さと響きがもう少しほしい。（大雲評）

渡辺秋湖書　135×70㎝

現代詩文書（千葉）

渡辺秋湖「一茶の句」

◆重厚な雰囲気で紙面を圧する。落款まで含めて少々粗雑な点が気になるが、これも魅力として考える。（蒼玄評）

◆激しい潤渇の変化でダイナミックな作。やや粗さが目立つが正面から立ち向かう姿勢を買う。（大雲評）

◆体から生れ出てくる動きが上手に生かされ大きな動きが表現され見事。かすれが上手に使われ見事。（倫子評）

◆迫力は大きな魅力で思いは十分伝わります。粗さが雑な感じとならない配慮があってもよいかと…。（明子評）

田中扇溪臨　70×135㎝

臨書（墨縁）

田中扇溪「臨争坐位文稿」

◆争坐位文稿の行の変化、潤渇のバランスをよくとらえている。更に大胆な動きが加われば期待する。（大雲評）

◆字に大小をつけて作品に生気を与えてくれるような原本に忠実な観察をしている感。筆線に切れ味を。（倫子評）

◆かな作品制作に学ぶべき古典として臨書した日を思い出し、丁寧な書きぶりに敬服。更に奥深く。（明子評）

◆顔法にしてはやや軽いかもしれないが、濃淡潤渇がうまく調和しまとまりのよい佳臨となった。（蒼玄評）

創作の部（45点）
漢字―13点
かな―1点
現代―19点
篆刻―0点
前衛―12点

臨書の部（32点）
漢字―27点
かな―5点

総出品点数 77点

〈特選候補者〉

（創作の部）

「漢字」
墨宣　小林　翠芳
声香　遠藤　華香
千葉　竹浪　叙舟

「現代詩」
四葉　千葉　清翠
千桜　金子　美千
翠吟　鈴木　承琳

「前衛」
山﨑　恵
蓮紅　田村　紅沙

（臨書の部）

「漢字」
大雲　小川　白舟
安波　鈴木　英晴
玄象　大鹿　洋江
英峰　佐藤　桂香

「かな」
ＡＩ　清水由紀子

漢字研究部
（争座位稿）

選評　竹田尚堂

今月のホープ作品

井上狐无

漢字研究部　特選　井上　狐无

リズム感ある質の高い書線、構えの大きな字姿、空間の筆意の大きさで碑文字に見事に生命を吹き込んで、更に内に蔵する真卿の熱情を余す処なく表現し魅力的です。書法だけに留まらない学書の深さが垣間見えます。

◎漢字研究部総評

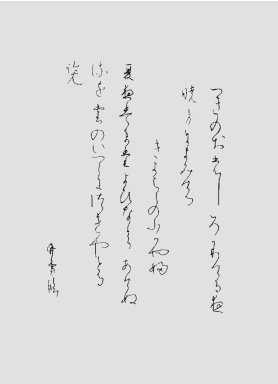
「この用筆の結果この書線、この形が生まれる」が筆理です。筆跡から遡って筆法を探り獲得しようとするのですから、感覚を鋭敏にして原帖を深く観察することが不可欠です。争座位稿は俯仰、抑揚、緩急相俟って息長く深い書線と多様で懐の広い字形を為しています。形のひとつ向こうに視点を定め、その用筆を感取したいのです。最上位の作には高い目的意識を感じました。文字の実画と傷みとの判別に字書の活用が大切です。

美翠翆良雅雪　慶華一麗紅南　依素良愛幸祥　柳白郁美加景
香峰径泉子篁　子淞琴流雲汀　未春子石泉風　芳雅子代都燁

かな研究部
（関戸本古今集）

選評　善養寺　紅　風

今月のホープ作品

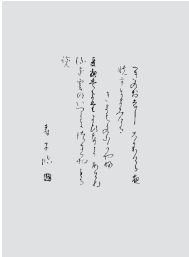


濱田竹雪

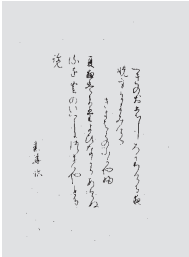
潤渇をきかせメリハリのある右回転のダイナミックな連綿線を巧みに使いこなしています。日頃の研鑽がうかがえる見事な作品になりました。

◎かな研究部総評

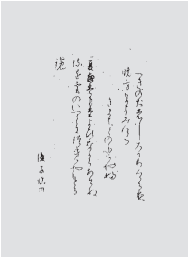
数多くの作品がよせられました。正確な作品が多い中、最後の覧・の字に筆順の誤りがあり残念でした。墨色、字の大小等も細心の注意で筆をとって下さい。



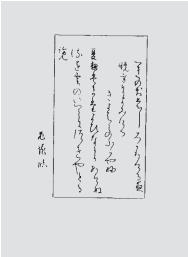
寿初香子　由紀江



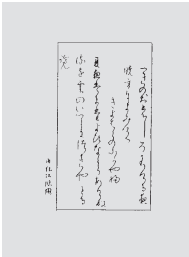
春順華　美加子

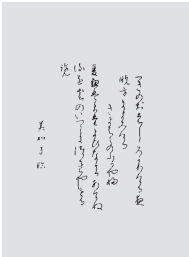


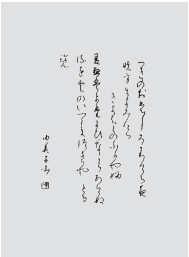
優雅泉子　由美子

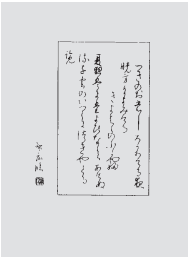


飛竹龍　智広









かな研究部成績表

かな研究部　特選　濱田　竹雪

特選

洞雪　ＡＩ　伊藤竹雪
澄田寿子
昌苑佐藤初江
清月和春華
澄春宇田順子
うる木村峰加子
高崎小川美
蘭鼎高雅優子
竜泉橋飛龍
ＡＩ高生方泉
根津由子
黒柳竹葉
大雲柳智広
紅瑤木
上泉鈴
後山敬子
榎和子
明漢吉秋
苑崎玄加
高阪松佐
小野寺
吉田千
榎鶴
後和子
山敬子
鈴令子
黒智広
竹葉
飛龍
美雅子
優子
美子
加子
順子
春華
有雲和
誠大吉
秋月平
正翠波華
上泉柳
正華
大阪
高崎
苑書
明漢井
高城
宮泉
上瑤
紅雲
大崎
高Ａ
竜鼎
蘭川
高崎
うる
澄春
昌月
清春
宇田
大和
佐藤
伊藤
濱田
竹雪
石月
磯崎
甘雨
洋子
安波
石野
近中
石松
矢小
吉田
榎
後山
鈴木
黒柳
竹葉
飛龍
美雅
優子
美子
加子
順子
春華
宇田
大和
佐藤
伊藤
濱田
竹雪
清和
井上
江貝
加田
田藤
小野
石知
近津
中柳
石恵
松知
矢白
小登
吉江
榎千
和鶴
後敬
山令
鈴智
黒竹
飛龍
美雅
優子
美子
加子
順子
春華
宇田
大和
佐藤
伊藤
濱田
竹雪
英二
茂羅
清雨
雅子
寿藏
芳夫
雅久
英芳
清子
甘子
洋子
美子
加子
順子
春華
宇田
大和
佐藤
伊藤
濱田
竹雪

秀作（60音順）

渡辺　華祥　清月　和平　大雲　誠和　秋　有　安波　正翠華　上泉　正華　大阪　高崎　苑書　明漢　高井　宮城　上泉　紅瑤　大雲　高崎　ＡＩ　竜鼎　蘭川　高崎　うる　澄春　昌月　清春　宇田　大和　佐藤　伊藤　濱田　竹雪　鎌田　加藤　江田　井上　磯貝　石崎　石野　小寺　石川　近知　中津　石恵　松知　矢白　小登　吉江　榎千　和鶴　後敬　山令　鈴智　黒竹　飛龍　根津　生方　高由　川崎　小美　木村　峰加　宇田　大和　佐藤　伊藤　濱田　竹雪　寿藏　雅芳　茂夫　英二　清羅　甘雨　洋子　美子　久芳　柳子　恵子　知子　白子　鈴子　登子　加都　玄子　吉子　崎子　書子　秋子　敬子　令子　智子　竹葉　飛龍　美雅子　優子　美子　加子　順子　春華　宇田　大和　佐藤　伊藤　濱田　竹雪

佳作（60音順）

もく　青木　藤　連　聖惇　昌苑　白鷺　大雲　前橋　ＡＩ　澄春　前橋　上泉　〃　玉松　小汀　大阪　艸崎　倉吉　有秋　澄春　ＡＩ　明漢　八生　正華　蔦崎　高書　〃　竜泉　樹原　翠吟　清月　蘭鼎　正華　生大　北又　木原　小林　板橋　林さくら　嘉江　閑窓　淑子　近藤　近美　小林　後藤　後知　良子　酒井　須水　渋田　佐谷　佐々木　和子　喜萩　晃代　純風　白篁　恵子　玄城　山房　惠舟　茱華　紫蘆　信城　翠子　陽子　彩香　星祥　久子　代子　祥園　洋子　英子　紫泉　春峡　輝子　渡邊　吉田　山崎　堀切　別府　藤村　深澤　春山　濱田　長谷　橋本　永瀬　中真　中雅　中由　武江　高井　庄丸　清澤　嶋田　篠与　椎名　櫻田　坂本　里井　恵美　後藤　後美　後知　閑子　淑子　近窓　近藤　小林　小林　板橋　木原　北又　恵子　翠子　綾子　香織　幸雲　信子　昌子　月子　佳月　勝美　陽一　千峰　紅霞　蓉汀　本子　瀬真　澤雅　村由　中美　本子　丸子　橋子　幸源　苑由　紀子　祢子　恵子　美子　子子　田名　本井　井丸　澤子　田中　野水　田谷　藤本　藤美　藤知　藤子　藤子　原吟　樹翠　月清　泉蘭　華正　木北　輝春　峡子

入選（60音順）

うる　澄春　千石　高陵　風書　五紅　紅苑　調布　春汀　澄春　石習　千葉　詢玉　玉扇　高崎　遊雲　正華　書泉　秀水　大泉　泉会　立精　玉ま　や春　澄春　竜泉　紅瑤　千葉　春汀　大阪　椿翠　奥田　たか　千葉　大雲　若葉　幕張　梓江　艸玄　如月　秀水　こ春　玉汀　こだ　高真　た春　澄明　秀春　正華　八戸　生大　大阪　飯高　足嶋　會木　遊佐　森田　茂木　武藤　宮野内　宮丸　松平山　平村　野中　根本　西江　永井　都み　寺澤　辻田　千田　田中　田玉　高野　泉水　須田　渋谷　佐々木　後藤　小林　小林　河野　河野　高武　工藤　北村　川元　亀井　金子　門脇　加藤　沖　小川　大石　梅山　梅津　岩佐　岩瀬　岩崎　伊藤　市川　石橋　生ひ　駒さ　萩子　幹生　紫苑　万琇　勇介　香風　睦子　真蘭　蔦睦　満津　幸枝　愛平　彩石　陽華　喜詢　喜子　雅子　宏香　純枝　晃代　白風　白篁　恵子　玄子　山城　惠房　茱舟　紫風　蘆城　信子　翠子　和陽　彩子　星香　久祥　代子　祥子　園子　洋子　英子　紫泉　花子

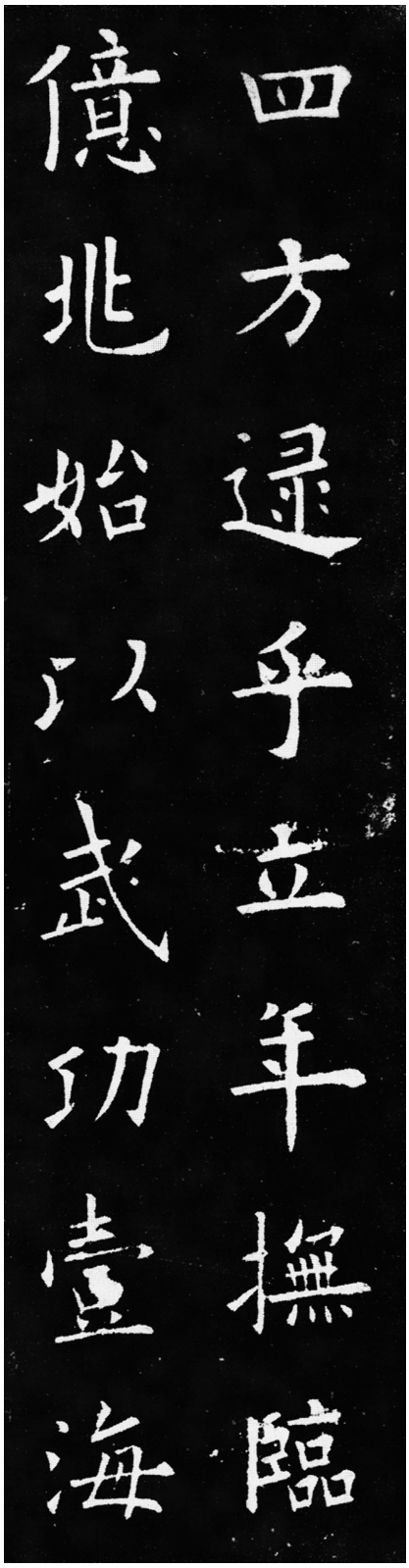
華仙　祥紫　顧緑　光昭　弘舟　松杜　玉ま　〃　たか　正華　竹宇　昌苑　澄春　や春　樹翠　京橋　蒼陽　枝苑　筑桜　Ｎ　Ｈ　華祥　広島　詢扇　英峰　彩　生大　大雲　東峰　安波　大阪　樹原　玉藻　秀明　渡辺　蔦書　春汀　昭微　石習　幕張　梓江　艸玄　如月　秀水　こ春　玉汀　こだ　高真　石習　彩ま　Ｎ　Ｈ　華祥　岩街　こだ

鈴木　杉田　志水　嶋　渋谷　鹿世由　塩澤　猿渡　猿篁　佐麻　櫻美　坂舟　麗苑　齊静　齋枝　藤か　紺つ　近遊　込松　小美　小沼　小泉　小智　熊野　熊谷　工紫　吉蘭　岸藤　菊瀬　池雨　亀井　小寺　小野　小礼　奥山　荻原　翠光　玉峰　大藻　大森　大喜　淳代　大子　恵枝　内里　南子　惠龍　宇野　内田　皆泉　一弘　玉楠　宇川　岩井　岩祥　入郁　今関　今井　井元　犬飼　伊敏　伊京　伊東　藤子　良佑　板垣　石渡　石崎　五子　十風　佳正　栄子　睦子　起子　由香　由美　香子　志江　世紅　澤華　冬右　篁美　麻舟　麗苑　静枝　遊山　松春　藤子　紺風　近子　松春　藤子　惠子　小沼　初風　泉子　谷涼　紫蘭　香雨　彩東　善高　河敬　亀井　芳香　小寺　礼子　萩光　翠峰　玉藻　喜代　淳子　大森　大阪　大沢　恵枝　龍恵　華泉　皆弘　楠麗　祥苑　郁子　悠子　和霞　今関　今井　井元　花枝　玉香　道石　敏子　京子　伊東　藤子　良佑　板垣　渡辺　石崎　正子　五十風　佳栄

選外227名氏名略　白露　芳蘭　京橋　青峰　北陸　竹美　樹原　東伯　華玉　玉仙　如山　松月　こ村　硯水　菊月　こだ　千葉　高崎　澄春　白京　木橋　泉会　湘南　生大　澄春　大阪　幕張　樹原　大阪　大水　秀向　東珠　白土　士気　秀畝　一川　玉葉　生大　千葉　大阪　水汀　春汀　遊雲　大阪　上原　幕張　春光　大阪　竹扇　青峰　高陵　渡辺　吉田　吉田　横田　十四　横山　遊佐　山本　山口　谷知　八裕　茂木　宮寺　宮澤　宮崎　三川　嶋　松重　松浦　増田　牧野　堀江　堀川　北條　古郡　藤本　藤須　深堀　廣地　林早　浜野　浜坂　花里　畠山　西澤　西澤　長島　中一　中琴　豊田　翠綾　戸村　富澤　渡理　徳永　徳玉　萩舟　高久　高橋　高喜　高司　井　平　住吉　和子　渡辺　重子　信溪　佑子　光一　治真　四一　蘭舟　一栄　真雪　紀翠　順子　翠子　芳子　晴草　英明　敏子　翠景　玉江　華秀　優子　魯春　幸泉　靖子　喜恵　清洗　美幸　玉華　梅艸　永篁　香織　智子　芝香　裕人　瑠美　一水　琴　綾　翠玉　博舟　萩彩　惠子　紀子　渓仙　萩峯　賢子　久雲　高子　桜　小秋　杏華　和子

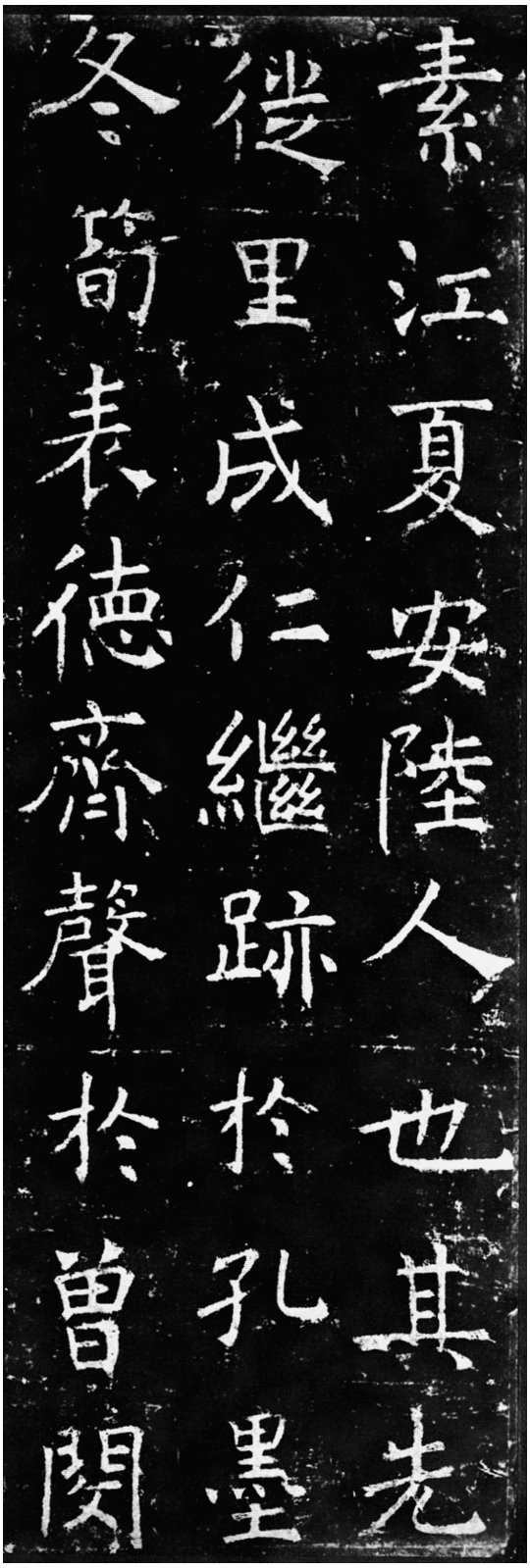
〔特別昇級試験臨書課題〕

九成宮醴泉銘（楷書）　漢字部　第一種　半紙に写真掲載の中から5字を臨書・それ以外は不可



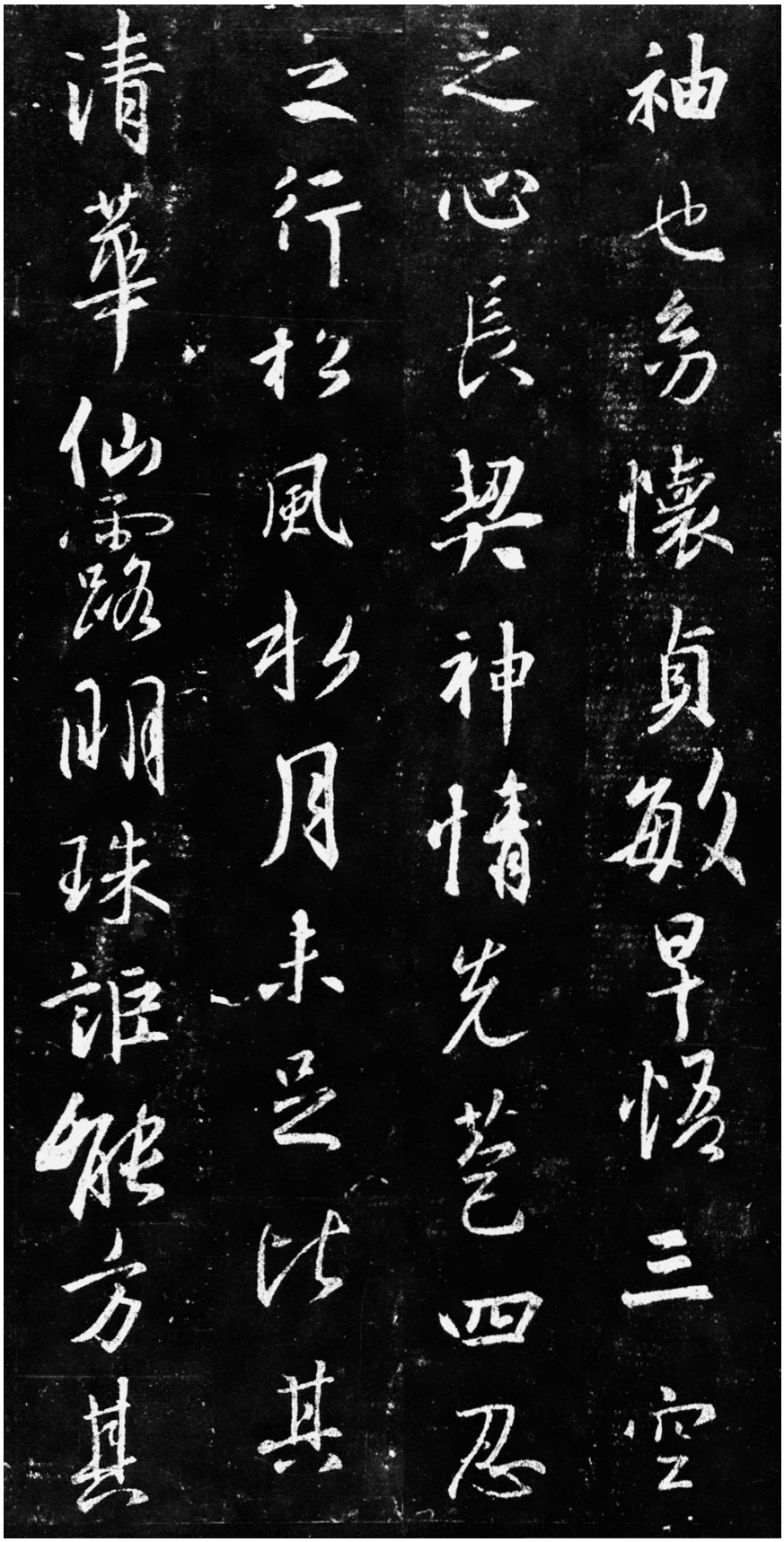
四方逮乎立年撫臨／億兆始以武功壹海

孟法師碑（楷書）　漢字部　第三種　半紙に写真掲載の中から24字～27字を臨書・それ以外は不可



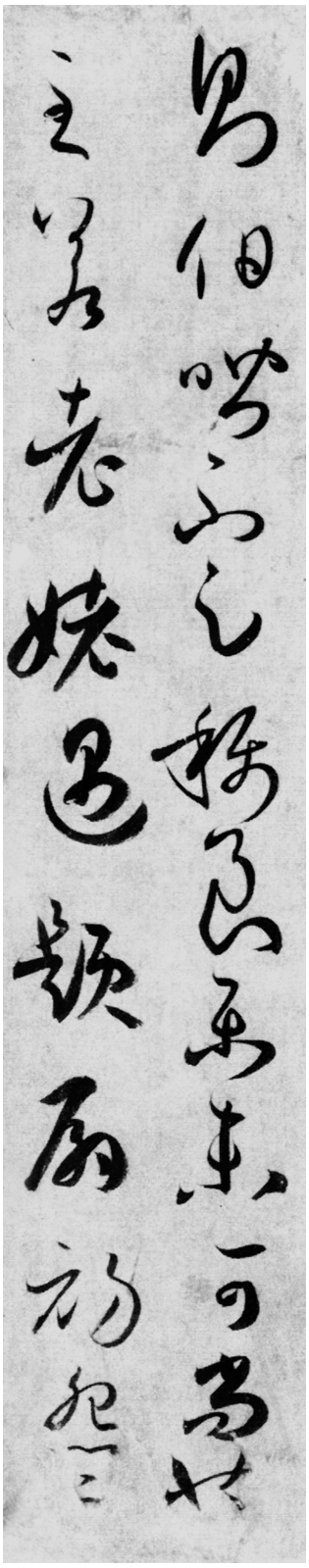
素江夏安陸人也其先／徙里成仁繼跡於孔墨／冬筍表德齋聲於曾閔

集字聖教序（行書）　漢字部　第二種　半紙に写真掲載の中から12字を臨書・それ以外は不可



書譜（草書）

漢字部　第三種　半紙に写真掲載の中から6字を臨書・それ以外は不可



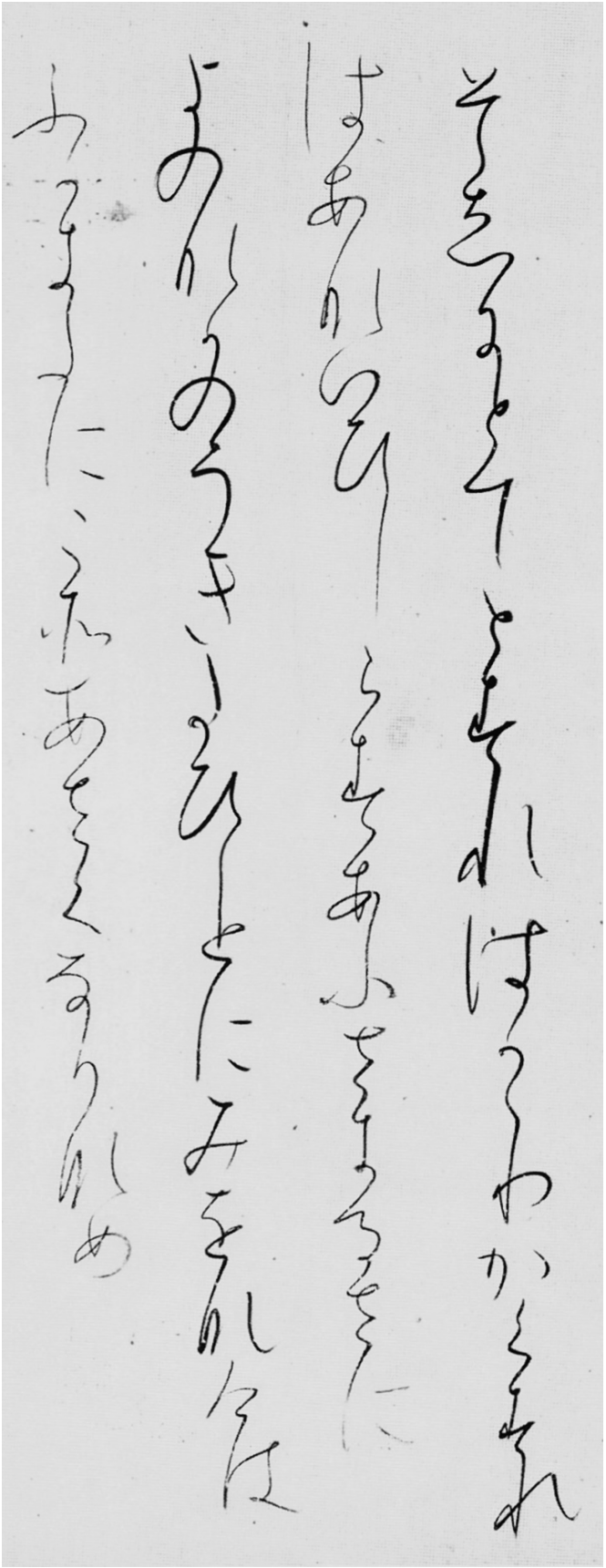
則伯喈不レ足レ稱。良樂未レ可尚也。／至レ若下老姥遇二題扇一。初怨而

雁塔聖教序（楷書）

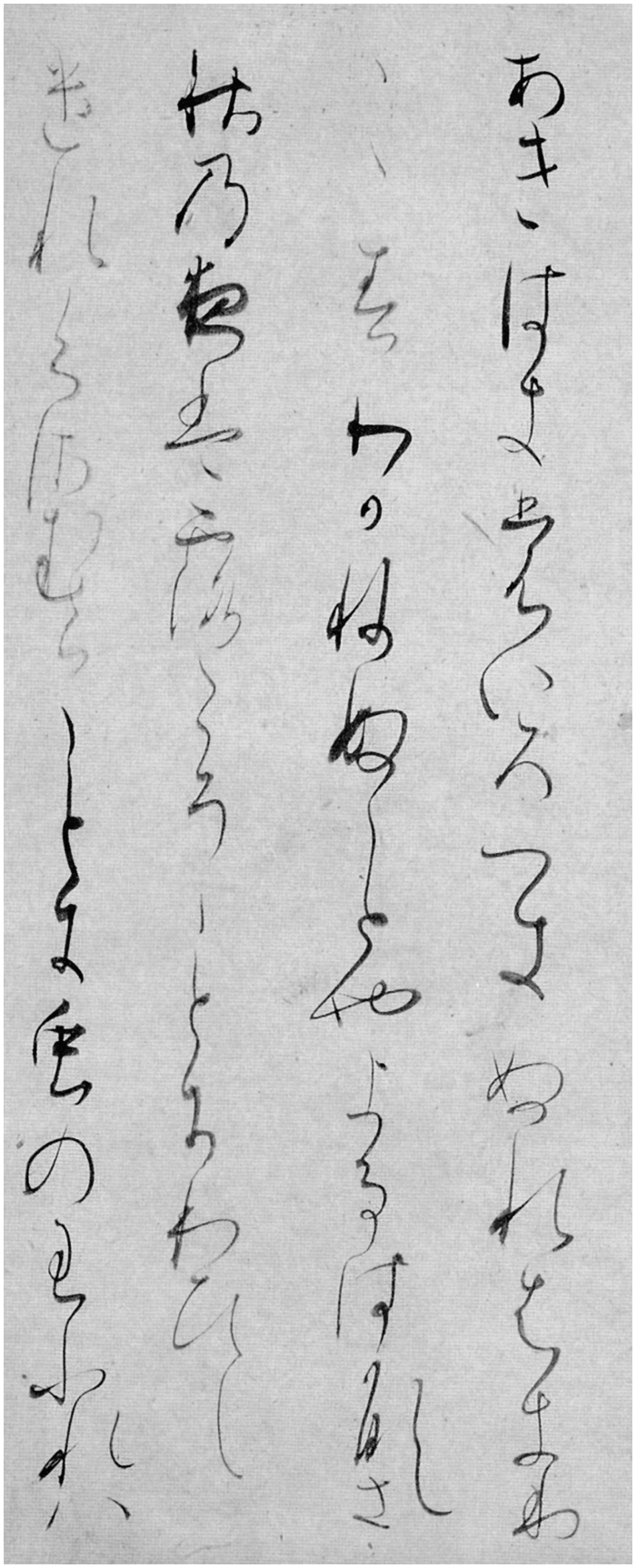
漢字条幅部　第二種　半切に写真掲載の中から14字を臨書・それ以外は不可

庭二而皎レ夢。照二東域一／而流レ慈。昔者分形／分蹟之時。言未レ馳

高野切第三種　かな部　第一種　半紙に写真掲載の和歌・二首を書く・それ以外は不可（料紙可）



そ恵尓にとてとす春れば可かゝ利りかくす久れ／ばあな那いひしらず春あふさきる支さに
よのなか那可のうきた多びごとにみをなげ那介ば／ふか可きた支多にこそあさく久なり那なめ

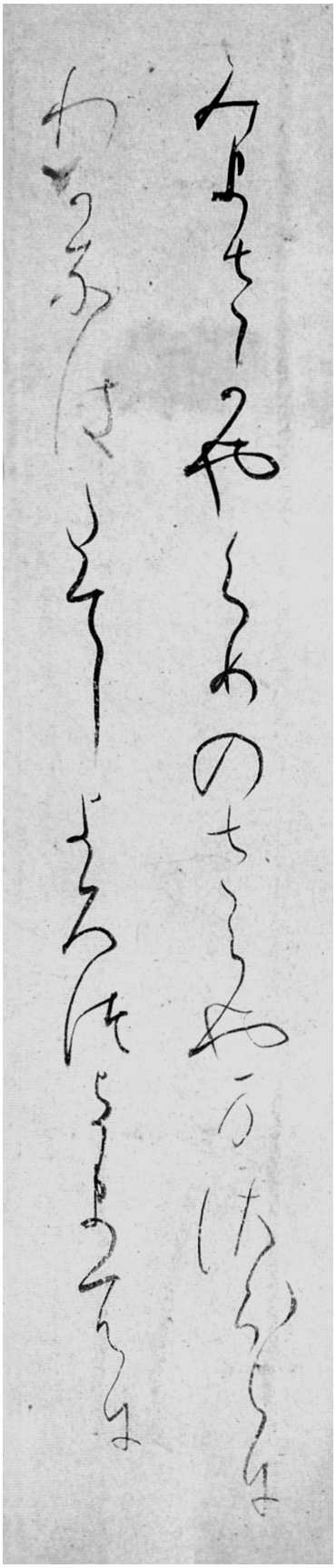


あきはぎもいろづきぬればきり／ぐすわがねぬごとやよるはかなしき
秋の夜は露こそことにわびし／けれくさむらごとに虫のわぶれば

高野切第一種

かな条幅部

第三種　半切に写真掲載の和歌を書く・それ以外は不可（料紙可）



みまさか可久やくめのさらやまさら万佐〳〵に尓／わがなはたてじよろづよまでに可奈多徒与天尓

ご注意!!

名前のかき方

どの部も氏名または名、号を書く。臨書は○○臨と書く。印だけでは失格、特にかな・ペン字は注意のこと。